

# GLOBAL VOYAGE

[グローバル ヴォヤージュ]

PEACE BOAT  
\*2019\*  
Winter

待望のオセアニア一周  
ミドルクルーズ

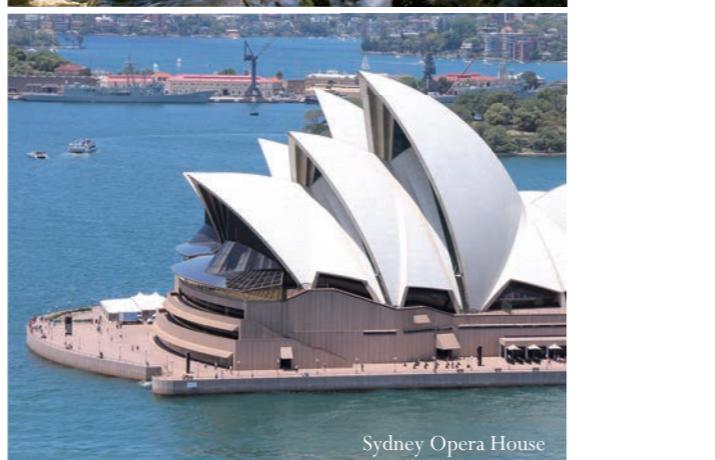
色鮮やかな紅葉の世界

第二特集

魅惑のメープル街道へ  
[ケベックシティ・モントリオール]

# オセアニアの船旅へ

地球の鼓動を全身に感じる



Sydney Opera House



第103回クルーズは、冬の日本を抜け出して、夏の南半球へ。多彩な魅力であふれるオーストラリア全5寄港地を巡った後は、ニュージーランド屈指の景勝地「ミルフォードサウンド」を遊覧。エレガントな街並みとたくましく豊かな大自然、そこに息づく歴史ある文化との出会いが魅力の、待望のオセアニア一周クルーズへ。

## CONTENTS

### 特集

#### 地球の鼓動を全身に感じる オセアニアの船旅へ

- オセアニアの自然を満喫 ..... P4
- オセアニアの美しい街 ..... P8
- 先住民族との交流 ..... P10
- 固有種の楽園 ..... P11
- 水先案内人特別寄稿  
海堂 尊さん ..... P12

### 第二特集

#### 色鮮やかな紅葉の世界 魅惑のメープル街道へ

- ケベックシティ ..... P14
- モントリオール ..... P16
- PEACE BOAT NEWS ..... P18



*Ocean Dream*

オーストラリア・悉尼港停泊中のオーシャンドリーム号

表紙の写真  
朝と夜で表情を変えるシドニーの街並み。第103回  
クルーズで寄港予定だ。

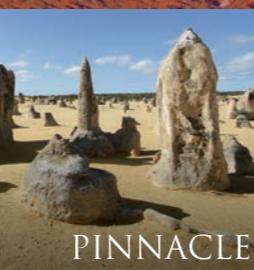


## AYERS ROCK/ULULU

赤い大地に忽然と姿を現す、高さ約350m、1周約10kmを誇る巨大な一枚岩。近年ではアボリジニ文化を尊重し、彼らの呼び方「ウルル」という正式名称に。



ピナクルズ  
ナンバン国立公園の一角落にある。一帯は砂漠だが、公園があるのはインド洋の海辺。岩はどれも形やサイズがさまざまおもしろい。〈グレートオーシャンロード〉「十二人の使徒」の由来は、かつて12の岩が突出していたことから。今は南極海からの波や風によってそのいくつかが浸食された。



PINNACLES



GREAT OCEAN ROAD

## 広大なオーストラリア大陸で感じる地球の息吹

オセアニアの中でも86%の陸地面積を占め、広大な土地がどこまでも続くオーストラリア。「地球のへそ」と呼ばれるエアーズロックをはじめ、神秘さが魅力のピナクルズ、壮大な海岸道路グレートオーシャンロードなど、思わず息を呑むような絶景が点在している。

オーストラリアの人々ですら、「生に一度見ておきたい」という世界遺産「エアーズロック」。現地では、1万年以上前から定住していた先住民族アボリジニの言葉で「ウルル(偉大な石)」と呼ばれている。麓には洞窟があり、内部には彼らによつて描かれた壁画が残るなど、アボリジニにとって神聖な場所として崇められていた。表面の赤土は陽の当たり方によつて、オレンジや真紅、紫など表情を刻々と変え、地球が生み出したこれらの芸術は一日中見ても飽きることはない。

オーストラリア西部にあるもうひとつ世界遺産が「ピナクルズ」。黄色の砂の丘に何百年という歳月をかけてできた岩の塔が幻想的な場所だ。かつてこの地は海底だったとされ、貝殻でできた何千もの塔は、その様子から「荒野の墓標」とも称される。まるで別世界へ足を踏み入れたような不思議な光景に圧倒されるはずだ。

そしてメルボルンの南西全長約250kmに及ぶのが、世界美しい海岸道路として知られる「グレートオーシャンロード」。複雑に入り組んだ断崖絶壁や奇岩群が延々と続く道のりはまさに絶景。海中からいくつもの奇岩がそびえる「十二人の使徒」は最大の見どころだ。

地球にこんなところがあつたのかと思わず言葉を失う感動の連続が、我々を待ち受けている。



付近の年間の降水量は6,000mm超。大量の雨が豊かな森を育み、岩肌を伝う大小さまざまな滝をいくつも見ることができる。デッキに出て景色を楽しむのがおすすめだ。

の迫力は圧巻のひとことだ。ところで小さな滝が見え、常に表情をえる絶景の連続は、船旅を選んだ者だけが味わえる至福の時間だ。

このあたりは雨が多い地域としても知られるが、急に雨が降ったり晴れ渡りたりと、その様相も神秘的。今クルーズでは、「ダントンフル・サウンド」や「ダスキー・サウンド」を含む、5つのフィヨルドを遊覧予定だ。

一方で固有種の楽園といわれるオセニアを肌で感じるには、オーストラリア最大の島であるタスマニア島へ。州全体の20%が原生地域のまま残つておる、島にある17個ほどの国立公園の多くが世界遺産にも登録されている。「マウントフィールド国立公園」では、階段状になつた崖の上から、いくつもの水流が流れ出ている「ラッセルフォールズ」が有名。今もここで多くの野生動物が暮らし、島固有の希少動物と出会える確率も高く、世界的にも人気の観光スポットだ。



## TASMANIA

タスマニア島は氷河期にできた独特の地形と自然が魅力の島。大きさは北海道の8割程度で、赤道からの緯度もほぼ同じ。「ラッセルフォールズ」は、タスマニア島で最初の自然保護区に指定された。



階段状の滝が特徴のマウントフィールドナショナルパークのラッセルフォールズ。

オセアニアの大自然を語るには、断崖絶壁の山々の間を船でゆく「ミルフォードサウンド」も外せない。ここは世界自然遺産に登録された世界有数のフィヨルド群を含む国立公園のひとつ。雪をかぶった峰を遠くまで望み、穏やかな水面の上をおよそ半日かけてゆつくりと船は進んでいく。長い年月をかけて氷河に削られた山々は、高さ1000mを誇り、目の前に迫る岩肌

# 悠久の歳月が生み出した 息を呑む美しい光景との出会い

地球が長い歳月をかけて生み出してきた絶景の数々。オーストラリアでは、固有種の楽園と呼ばれるタスマニア島へ。ニュージーランドでは、オセアニアクルーズのハイライトといえるミルフォードサウンドへ。どちらも雄大で深い緑が輝かしく、幻想的な光景が続く。



## MILFORD SOUND

タスマニア島に面した海岸線に連なる大小14のフィヨルドのうちのひとつ。これら一帯を指す「テ・ワヒポウナム」は1990年に世界遺産に登録。



オペラハウスの周辺は散策にも最適。ライトアップされた姿もきれいだ。

港の近くにはフイッシュマーケットがあり、メルボルンでオージー牛があり、メルボルンとはまた違った、近代都市と自然の調和を肌で感じてほしい寄港地だ。

Sydney



8:新鮮なシーフードはぜひ味わってほしい。ロブスターなどがある。9:お土産の定番はやっぱりコアラ。お土産の種類も豊富だ。



6:100万ヘクタールに及ぶ世界遺産「ブルーマウンテンズ国立公園」。ユーカリの木々が美しい。7:現地の人々で多く賑わう「ボンダイ・ビーチ」。立派な波に乗るサーファーたちの姿も。カフェも多く楽しむ方はそれぞれ。

サンフランシスコやナポリに並んで「世界三大美港」に挙げられることもあるオーストラリアのシドニー。ランドマークとして有名な世界遺産「シドニー・オペラハウス」や「ハーバーブリッジ」といった一番の見どころを上陸前から味わえるのは、船旅を選んだ者だけの特権だ。さらにはヨットやフェリーなど大小さまざまな船が行き交い、港町としての活気を感じられるはずだ。また夜の出港時には、燐然と輝く美しい夜景も魅力。

港の近くにはフイッシュマーケットがあり、メルボルンでオージー牛を味わうなら、ぜひオージー牛を味わってほしい。ロブスターなどがある。9:お土産の定番はやっぱりコアラ。お土産の種類も豊富だ。

## 世界二大美港のひとつ「シドニー」



ビーフを味わうならば、ここシドニーでは新鮮なシーフードを楽しむのがおすすめ。街中には動物園があり、コアラをはじめとした豊富な種類の動物たちとの出会いを気軽に楽しめるのもうれしい。

フェリーに乗ると近郊のビーチなどに行くことができ、海を眺めながらおしゃれなカフェでフイッシュアンドチップスを食べるのも、現地を知り尽くした人のみぞ知る通の楽しみ方だ。

この街に来たならば、ぜひ足を延ばして訪ねたいスポットが「ブルーマウンテンズ国立公園」。ここは数多くの滝や渓谷を有する人気の世界自然遺産で、先住民族アボリジニの伝説が伝わる奇岩「スリーリースターズ」や、雄大な景観を楽しめる「エコール・ポイント」など、一度は見ておきたい絶景が広がっている。また途中で見える木々はどれも日本では見かけないものばかり。

メルボルンとはまた違った、近代都市と自然の調和を肌で感じてほしい寄港地だ。

## 多様な文化が魅力のオセアニアの街へ

移民大国として知られるオーストラリアとニュージーランド。さまざまな人種が集まって形成された国だけに、街のいたるところでそれを感じられる。ここではオーストラリアで特に人気の2都市を紹介する。



1:移動には路面電車(トラム)が便利なのでぜひ活用を。レトロな雰囲気で、乗るだけでも楽しい。2:街中に緑が多いのもメルボルンならでは。



おしゃれなカフェが多いのは、この街ならでは。気になったお店で至福の一杯。

## 世界で最も住みやすい街「メルボルン」



Melbourne



3:オージービーフは絶品。4:雰囲気の良いカフェがたくさん。5:郊外にワイナリーが点在しワインも有名。

2010年より7年連続で「世界でもっとも住みやすい都市」1位に選ばれたオーストラリア・メルボルン。港から路面電車に乗り、1日あればメルボルン観光を充分に楽しめるコンパクトな街だ。街は碁盤の目状に道が広がっているのが特徴で、散策におすすめなのはメインストリートから続くケーンウエイと呼ばれる石畳の路地。そこを歩いているとよく目にするのが、おしゃれなカフェの数々。実は歴史的にイタリアからの移民が多く、その影響で今もカフェ文化が深く街に根付いている。他にもかわいらしいお土産屋が建ち並ぶなど、まるでヨーロッパに来たかのような不思議な感覚に陥る。

イタリア以外にもさまざまな国との文化と生活がうまく融合した点から、移民が多く、その影響で今もカフェ文化が深く街に根付いている。他にもかわいらしいお土産屋が建ち並ぶなど、まるでヨーロッパに来たかのような不思議な感覚に陥る。イタリア以外にもさまざまな国との文化と生活がうまく融合した点

2010年より7年連続で「世界でもっとも住みやすい都市」1位に選ばれたオーストラリア・メルボルン。

港から路面電車に乗り、1日あればメルボルン観光を充分に楽しめるコンパクトな街だ。街は碁盤の目状に道が広がっているのが特徴で、散策におすすめなのはメインストリートから続くケーンウエイと呼ばれる石畠の路地。そこを歩いているとよく目にるのが、おしゃれなカ

一方、芸術の街としても有名で、見どころは多く、1854年に建てられた「フリンダース・ストリート駅」や、メルボルン万博のために造られた「カーネギー庭園」など19世紀の

面影を残す建物の数々も必見だ。

この街で行われる交流コースも、

他民族で成り立っているメルボルンならでは。移民を多く受け入れて

いる団体を訪問し、さまざまな話を聞くことで、メルボルンの今に触れることができる所以人気だ。

もこの街の魅力。それぞれの国の

カラーが反映された、この土地ならではの料理を味わうのも楽しみ

方のひとつだ。



# 固有種の楽園

## オーストラリアのユニークな生き物たち

日本の約20倍もの本土面積を誇るオーストラリア。さらに早くから他の大陸と分断されていたため、コアラやカンガルー、タスマニア・デビルなど、独自の進化を遂げた動物たちが多く生息する。現在、哺乳類と鳥類だけでも1000種類以上が確認されており、驚くべきはそのほとんどが固有種という点。今回は上陸中に目撃できる可能性のある生き物の一部を紹介する。



**カンガルー**  
体長:85~160cm  
[遭遇難易度★☆☆]



**ワラビー**  
体長:30~90cm  
[遭遇難易度★☆☆]



**コアラ**  
体長:60~80cm  
[遭遇難易度★☆☆]



**ワライカラセミ**  
体長:39~45cm  
[遭遇難易度★☆☆]

オーストラリアのシンボルともいえる存在。地域にもよるが、野生のコアラに出会えることも、有名な「楽しい森の住人」だ。



**ロリキート**  
体長:20~30cm  
[遭遇難易度★☆☆]



**タスマニア・デビル**  
体長:57~65cm  
[遭遇難易度★☆☆]



**ウォンバット**  
体長:100cm  
[遭遇難易度★☆☆]



**フクロギツネ**  
体長:33~55cm  
[遭遇難易度★☆☆]

人間を恐がらないため市街地に現れることもしばしば。ただし夜行性のため遭遇は難しい。



**フェアリーペンギン**  
体長:40~45cm  
[遭遇難易度★☆☆]



**オナガイヌワシ**  
体長:81~110cm  
[遭遇難易度★☆☆]



**カモノハシ**  
体長:40~55cm  
[遭遇難易度★☆☆]



**エリマキトカゲ**  
体長:60~90cm  
[遭遇難易度★☆☆]

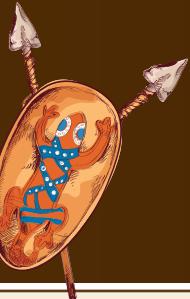
首のフリルがチャームポイント。相手が強いとわかると、立ち上がりでガニ股で走り去る。

やや前傾姿勢で歩く姿はとても愛くるしい。海岸近くの民家の下などに住むことがある。



## 伝統文化を今に伝える アボリジニやマオリとの交流

ピースボートの船旅の魅力は、観光だけでなく、その地域の人々が抱える問題に向き合い、直接その声を聞ける機会があるという点。特に第103回クルーズでは、先住民族として暮らしてきたオーストラリアの「アボリジニ」、ニュージーランドの「マオリ」の人々との心あたたまる交流の場が設けられている。



Indigenous Australians New Zealand

シドニー湾クルーズとアボリジニ体験  
かつてイギリスの植民地支配のもとにつくられたオーストラリア。時代とともに世界中から大勢の人々が移り住んでいたことによって、今の「多民族国家」が築き上げられている。

その歴史の中で、紀元前からこの地に暮らしていた先住民族アボリジニは、先祖から伝えられた土地を奪われ、厳しい差別を受けてきた過去があることを知つておきたい。近年になってようやく土地の権利などを認める動きが出ているが、いまだその差別は根強い。過去にシドニーに寄港した際には、彼らが抱える雇用問題の話を聞いた。

今後も、それらの豊かな文化を体感できる交流コースを実施予定。伝統料理を食べるなどして、彼らの暮らしや歴史を肌で感じてみたいところだ。

## マオリ文化体験 ニュージーランドに息づく

「アオテアロア」はマオリの言葉で「白く長い雲のたなびく地」を意味し、古くから彼らがニュージーランドを指して呼んできた言葉だ。この名前が正式な国名として認められるようになつたのは近年の話。

ニュージーランドの先住民族であるマオリは、1000年以上前からこの地に暮らし、自給自足の暮らしを営んできた。しかし大航海時代をきっかけにヨーロッパ人がやってきたことで社会は激変。19世紀にはイギリスの植民地となり、マオリの言語や文化は消滅の危機に陥った。しかし当時のマオリの中から復興運動が起こり、かつての伝統文化を今に紡いでいる。

現在、ニュージーランドでマオリのアイデンティティを持つ人々は人口の15%といわれるが、マオリの言葉や文化は、先住民族でない国民にも広く浸透している。ニュージーランドにおける交流コースでは、マオリの伝統文化を継承し続ける人々に出会い、歴史や文化を学ぶ。例えば、鼻と鼻をくっつけるというマオリ独特の挨拶など、現地にしつかりと息づいてきた文化に触れる貴重な機会になるはずだ。



島のところどころでアボリジニ文化を感じる。彼らのパフォーマンスには思わず見入る。



ニュージーランドの先住民族であるマオリは、1000年以上前からこの地に暮らし、自給自足の暮らしを営んできた。



アボリジニが狩猟や穴掘りに使ったとされるブーメラン。人気のお土産のひとつだ。

海堂 尊さん特別寄稿

# レツツ・ピースボート

『チーム・バチスタ』シリーズで知られるベストセラー作家・海堂尊さんに、水先案内人として乗船したピースボートクルーズの魅力について執筆いただきました。



想像を超える楽しさと新鮮な驚き

ピースボートの名前は聞いたことがある、という人は多いでしょう。かく言う私がその名を目にしたのはウン十年前の居酒屋の戸口で「百万円で世界一周旅行を」というポスターを見た時でした（うろ覚え）。それ以後も何度も何度となくそんな風に目に入っていたけれど、自分には縁遠い世界だ、と思い込んでいました。でも昨年、水先案内人として乗船したところ、これが想像を超える楽しさでした。

私は取材で海外に行くことが多いのですが、ピースボートのクルーズでは海外旅行のストレスがほとんどなかったのも新鮮な驚きでした。

船内は三食昼夜つき、長旅で退屈しないようにいろいろな催し物が目白押し。外部のゲスト（私もその一人）の講演や歌や踊りやパフォーマンス。自主企画を立ち上げることもできます。毎朝の太極拳やダンスの講座もあり、船旅が終わるころには名人になれるかも。

食事の献立もよく考えられていて、三ヶ月食べ続けても飽きなさそうだし、バランスを考えられているので健康にもいいこと間違いないし。

世界各地の寄港地では上陸し、観光地訪問も組み込まれていて、上陸地に関する詳しいレクチャーまでついてくる。それはどんなガイドブックよりもわかりやすく、まさに至れり尽くせりです。



海堂 尊  
Kaido Takeru  
医師・作家

外科医、病理医を経て、現在は放射線医学総合研究所研究協力員を務める。2005年、『チーム・バチスタの栄光』で「このミステリーがすごい！」大賞を受賞。確かな医学知識に裏打ちされた作品で人気を集めている。著書に『ジェネラル・ルージュの凱旋』、『ケルベロスの肖像』、『ジーン・ワルツ』、『極北ラプソディ』、『ブラックペアン1988』、『ボーラースター ゲバラ覚醒』など多数。



「船室の扉を開けたらそこは外国だった」

海外旅行では移動が一番大変です。パスポートを身につけ、お金も盗まれないように注意を払う。旅先では当然の心構えとはいえ、ストレスであることは間違ひありません。

ところがピースボートなら心配御無用。パスポートは船に預けたまま、上陸時は船内カードがパスポート代わり。荷物は全部、船室に置きっぱなしでいい。川端康成先生が乗船していたら「船室の扉を開けたらそこは外国だった」という書き出しで、名作を書いていたかもしれません。

しかもショート・トリップから帰ればそこは自分の馴染みの船室。こうなるともはや、海外旅行の革命です。

おまけに船旅は時差ぼけがありません。たまに揺れて船酔いしても、酔い止めの薬を準備してくれているので無問題。

ハードルが高いのは費用と期間の二点だけ。でも三ヵ月間の宿代プラス三食の食費だと考えたら、決して高くない。

ならばあなたが三ヵ月の自由な時間を使えるご身分ならばものは試し、騙されたと思ってピースボートに乗船してみてはいかがでしょう。そうしたら私に誘われたことをきっと感謝するでしょう。ピースボートにはヘビー・リビーターが、大勢いるのがその証拠。何より、私がその予備軍のひとりなのですから。

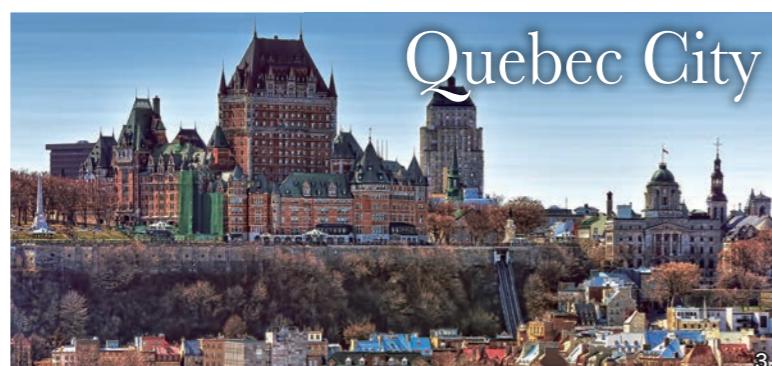


ピーク時には色鮮やかな紅葉で街  
一体が彩られる。「メープル街道」と  
名付けられるのも納得の光景だ。

### Quebec City Food & Goods



メープルシロップはお  
土産にも最適。  
海産物が有名なカナダ。  
スマーカーサーモンは絶品。



Quebec City

1:「首折り階段」の頂上は人気の撮影スポット。  
2:バロック様式の傑作「ノートルダム大聖堂」。  
3:アッパー・タウンにそびえるシャトー・フロンティエック  
はこの街のシンボル。4:「トルゾール通り」は素敵な  
絵画でたくさん。5:運がよければ要塞で兵隊の  
行進が見られることがある。



ダム聖堂」など見どころは満載だ。

アッパー・タウンとロウワー・タウン

をつなぐのは、急な勾配が特徴の「首

折り階段」。坂の多いケベックの街で最

古の歴史を誇る。

ロウワー・タウンでは、北米でもっとも古い繁華街である「プチ・シャンブル通り」が有名。石畳の小さな通りには、かわいらしいお店が建ち並び、服やアクセサリーなど、フランスらしい感じられるクラシカルな空間が広がっている。街歩きに疲れたら、ヨーロッパ風のおしゃれなカフェで休憩するのもこの街の楽しみ方のひとつ。

他にも、長さ10mほどの小道で、画家たちが絵を売っている「トルゾール通り」など見どころは尽きない。秋は紅葉が街全体を包み、まるで絵画の中に迷い込んだような至福の時間を過ごせるはずだ。

## ヨーロッパを彷彿とさせる 北米唯一の城郭都市ケベック・シティ

16世紀頃よりフランスの毛皮交易の拠点として発展したケベック・シティ。「ケベック」とは、先住民族の言葉で「狭い水路」という意味で、その名通り、セント・ローレンス川の川幅が狭まる地点にこの街はある。この州はフランス語が公用語とされ、北米にいながらもフランス文化を感じられる興味深い街だ。

世界遺産である「ケベック旧市街

の歴史地区」の特徴は、丘の上の城壁に囲まれたアッパー・タウンと、丘の麓にあるロウワー・タウンに分かれている点。標高100mのアッパー・タウンでひときわ目立つのは、レンガ造りで淡い青緑色の屋根が特徴の「シャトーフロンティエック」だ。かつては歴代総督の館で、ホテルとなつた今も当時の面影を残している。他にも、きらびやかなステンドグラスが美しい「ノートル



最近の気候変動で、カナダの紅葉も影響を受け、紅葉シーズンも年によって違っている。



色鮮やかな紅葉の世界  
魅惑のメープル街道へ

ピースボートでは初となる、「メープル街道」をゆく第102回クルーズ。カナダ国旗にも描かれた「カエデの木」が多く群生された街道は、北はケベック・シティから南はナイアガラまで約800kmに及ぶ。日本とはひと味違った紅葉を求め、晚秋のカナダへ。





## 「北米のパリ」モント利オール

セント・ローレンス川に浮かぶ大きな島にできた街、モント利オール。パリに次いで世界で2番目に大きなフランス語圏の都市だ。世界中から観光客が集まり、洗練された街の様子から“北米のパリ”と称されるほど。

モント利オール旧市街は、さまざま歴史的建造物が建ち並び、モダンで優雅な雰囲気はまさにパリそのもの。の中でも特に有名なのが「ノートルダム聖堂」。黄金の祭壇がコバルトブルーのライトに照らされ、教会全体を包む金と青のコントラストは息を



1:モント利オールの最高地点、263mに建てられた「聖ジョセフ礼拝堂」。2:夜になるとライトアップが美しい「モント利オール市庁舎」。カナダで最初に建てられた市庁舎だ。

歩んできた存在であることがわかる。さらに天井には約3万6000個にも及ぶ装飾された星々がきらめいて、これらが醸し出す神秘さが、世界の人々を魅了し続けている。

聖堂を訪れたなら、目の前のダルム広場中央にそびえる、モント利オールの祖メゾヌーヴの像も必見。旧市街にはおしゃれなカフェやレストランも多く、目的なしでも街歩きを楽しめる。カナダ第二の都市といわれるこの街の活気を感じるには、近代的な高層ビルが立ち並ぶダウンタウンへ。世界最大の地下街としても有名な「モント利オール地下街」では、メープルシロップといった定番のお土産をはじめ、ショッピングを楽しむには最適だ。ダウンタウンの北側へ足を延ばせば、北米で最大規模を誇る「ジャンタロンマーケット」も。地元の人々に親しまれたマーケットで、日本では見ることができない食材を見るだけでもおもしろい。ロッパの雰囲気が共存し、その表情の違いが楽しい寄港地だ。

## 第102回クルーズ PREVIEW

エキゾチックな世界遺産の街「ペナン島」  
かつてマラッカ海峡の貿易拠点として栄え、さまざまな文化が色濃く残るペナン島。見どころは、世界遺産の街「ジョージタウン」だ。イギリス植民地時代の名残りで、当時の榮華を感じさせるコロニアル調の建物に、マレー、中国、インド式の建物が混在し、異国情緒あふれる街並みが魅力だ。なかでも白亜の「シティ・ホール」はこの街のランドマーク的存在。アジアを代表するビーチリゾートとしても有名な島だ。

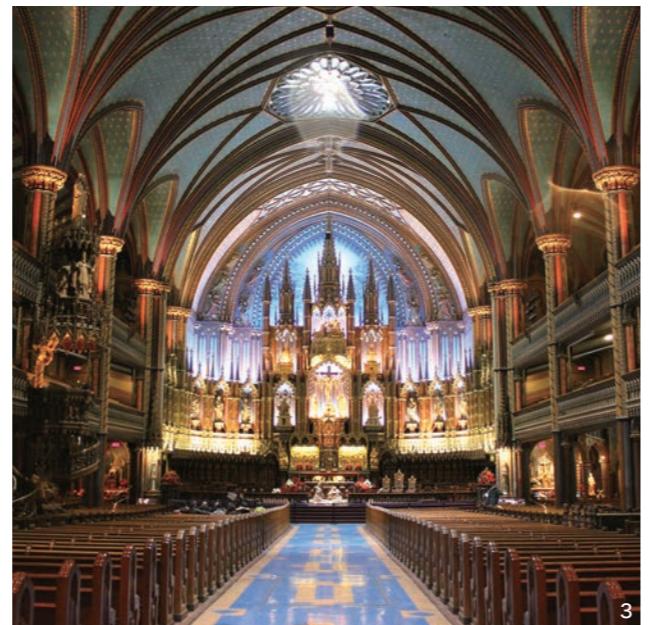


初寄港

優雅な雰囲気が魅力の「モナコ」  
フランス東部地中海沿岸に位置する小国モナコ。面積は2.km<sup>2</sup>ほどで、世界で2番目に小さな国だ。街全体が華やかで、どこを切り取っても絵になるこの街は、「リヴィエラの真珠」と称されるほど。F1グランプリが開かれることでも有名で、世界有数の難コースから「世界3大レース」の1つにも数えられている。ほかにもカジノを楽しめる「ル・カジノ・ド・モンテカルロ」など、小さな国だが見どころは尽きない。



6年ぶり  
寄港



3:「ノートルダム聖堂」は必見。教会全体が神秘的な雰囲気に包まれている。4:鮮やかな紅葉と洗練された街のコントラストがこの街の魅力。5:カナダで最も規模の大きい美術館のひとつ「モント利オール美術館」。6:「モント利オール植物園」はテーマに富んでいて1日いても飽きることがない。

### Montreal Food & Goods

ジューシーなスマートミートサンドはモント利オール名物。



フライドポテトにチーズがかかったブティンも有名。

かわいいらしいお土産もたくさん。割れ物でも船なら安心だ。



Montreal

ケベック州最大の都市。モント利オール国際ジャズフェスティバルや、世界的に有名な「シルク・ドゥ・ソレイユ」発祥の地としても知られる。

# 記念すべき第100回クルーズ出航

ピースボートが初めて大海原へ漕ぎ出したのは、1983年のこと。2018年で35周年という節目の年に、第100回ピースボート「地球一周の船旅」を迎えることになった。記念すべき今クルーズの行き先は南半球。「喜望峰」や「マゼラン海峡」を抜け、南太平洋の島々へ。大航海時代の冒険家と同じ航路をたどる、ロマンあふれる96日間の船旅が始まった。

「船に乗り、世界中の人々と出会うて気づいたこと、それは人種、肌の色、持っている価値観、いかなる理由でも私たちを分け隔てることはできないということです」。35年前に第1回の船を出した、ピースボート共同代表吉岡の想いがこもった言葉で始まった記念すべき第100回

クルーズ出航式。

12月26日の横浜港では、曇り空の隙間から眩しい太陽が姿を見せ、船側、岸壁側、双方のかけ合いで出航を祝福した。そして船長やクルーズディレクターの挨拶に続いて「セー



色とりどりの紙テープが交わり出航を彩る。



歴代クルーズディレクターも乗船。



船長たちによる乾杯の挨拶。ゲストもたくさん駆けつけた。

の！」の一聲で一斉に七色の紙テープが投げられ、船旅ならではともいえ  
る幻想的な光景が広がった。見送りに来た人々も大きく手を振り、そ  
れに応えるように「いってきます」と  
いった希望に満ちあふれる声が飛び交っていた。

翌日の27日には、神戸港へ入港。  
ここは船と港のターミナルの距離が近いことが特徴で、見送る人と旅に出る人が握りしめた1本の紙テープが離れる瞬間が特に感動的。今回は記念すべき節目のクルーズとい  
うこともあり過去の乗船者も多く、思いがけない再会を果たした人々も多かったようだ。

今までピースボートの船旅に参加したのは、のべ7万人。世界各国で訪れた港の数は200ヶ所以上だ。そんな今日まで続いてきたクルーズ



を祝福し、過去に水先案内人として乗船した音楽評論家作詞家の湯川れい子さんや、前ウ

ルガアイ大統領のホセ・ムヒカさんをはじめ、たくさんの方々から祝福のメッセージが届いた。

ようやく今回の船旅の仲間が全員揃ったオーシャンドリーム号では、ウェルカムパーティーが開催。華やかな衣装が船内を彩り、ウェルカムセレモニー、船長や歴代クルーズディレクターとの記念撮影など、各所でさまざまなイベントが行われた。セレモニーでは、船内生活を支えるスタッフやクルーがステージに登壇し、



横浜港でペイブリッジをくぐるシーンは、この船旅の代名詞。

## ジャパングレイスも設立50周年を迎える

JG JAPAN GRACE  
株式会社ジャパングレイス



代表取締役社長 要 和弘

初日から船内はひとつに。この35年という長い歳月の間、ピースボートでは災害支援やICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）をはじめ、数え切れないほど活動を実施。今クルーズでは、新たにフィリピンのNGO「Liter of Light（リッターライト）」と共に、「Voyage of Light（ボヤジ・オブ・ライト）」プロジェクトを行う。電気が届かない地域に暮らす人たちに、ペットボトルの廃材やLEDライト、バッテリーといった比較的どこででも入手がしやすい材料と、太陽エネルギーを使った持続可能な照明システムを届ける活動だ。今回はそのプロジェクトを推進する5名のメンバーが乗船し、世界一周の船旅でめぐる国々へ約



家族や友人など多くの人がお見送りに。

1000個のライトとその作り方などの知識を届ける。早速、出航式でも作りたての明かりを灯し、やさしい光でデッキが包まれた。

今クルーズ最初の寄港地は中国の廈門。「もう待切れないのでたくさんの期待と夢を乗せて、気高い汽笛を響かせながら、ピースボートクルーズの記念すべき第100回目の船旅がはじまりました。④

ジャパングレイスは、東京オリンピックから5年後の1969年、東京都港区青山にて国内旅行業務や各種催し物の企画運営を目的に設立されました。当時は旅行手配に加え、サントリーの新商品発表会やヤクルトスワローズの球団改名発表会など、さまざまな企画を担当しておりました。その後、海外旅行の自由化が進むなか、1975年から海外旅行も取扱うこととなり、北マリアナ諸島のロタ島を中心に、ミクロネシア、オーストラリア、バリ島へのツアーなどを展開していきます。同時に、公立小中高校教員の海外研修として、1ヶ月間のヨーロッパ訪問ツアーナども毎年行っておりました。

その後、1995年にNGOピースボートが企画するクルーズの主催旅行社となり、1998年に現在の新宿区高田馬場に本社を移転します。それから今日に至るまで、ピースボートと二人三脚で65回の

旅が平和をつくり、平和が旅を可能にする——当社の社是にもあるように、誰しも自由に旅ができるというものは平和という前提があるというは平和といふ前提があるといふことです。人と人との直接出会うことで互いの理解を深め、旅行を通じてより良い社会の実現に尽力していく。そんな船旅を私たちはこれからも目指します。設立から半世紀が過ぎた今、50年の感謝の気持ちを忘れずに、次の50年も「旅行業は平和産業である」という理念のもと、新たな出会いや感動を皆さまへお届けしてまいります。

# 船上百景 [正月]



青空の下、洋上で味わう鏡開きの一杯は格別だ。(写真は前クルーズ時)



夕食にはおせち料理が振る舞われた。



手づくりの和平船神社で初詣。

## 洋上で迎えるお正月は 一生の思い出

「3、2、1、よししゃー」。パカンと木蓋が割れ、ふんわりと広がる日本酒の香り。洋上で迎える記念すべき第100回クルーズのお正月。鏡開きが行われたブロードウェイラウンジには多くの人が集まり、樽酒を片手に新年の訪れを祝福しあつた。フリースペースには、乗船者の協力で「和平船神社」が完成。華やかな着物姿の乗船者たちが記念写真を撮るなど、船内はお正月一色に。鏡開きに来ていた60代の女性に話を聞くと「一度はクルーズ船に乗って年越しを過ごしてみたい」と夫と話していくと、ようやく夢が叶いました。いつものせわしない年末年始に比べ、今回は上げ膳据え膳で非常に楽ですね」と大満足の様子。乗客それぞれの想いを乗せて、船は南半球の大海上へ。洋上で迎える新年のひとときは、一生の思い出になるはずだ。

現在航海中のクルーズは、日本が冬の時期に南半球をめぐる「南まわり」と呼ばれています。このルート、実は今からちょうど500年前の1519年にマゼラン艦隊が人類史上初となる世界一周を達成した航路です。それから時は流れ、スエズ運河が開通して間もない1872年。近代ツーリズムの祖と呼ばれるトマス・クラックが、世界初の世界一周団体旅行を敢行します。開国したばかりの日本にも寄港し、横浜、大阪、長崎で観光を楽しんだとか。そして乗客の募集に使つたのが、当時としては珍しい色彩豊かなポスターだったと聞くと、いま日本中の街中に貼られているピースボートのポスターとのご縁を感じます。

ピースボートクルーズも1983年の船出からいろいろなことがありました。しかしそれら困難もすべて乗り越え、これまでに催行中止クルーズを一度も出さずに第100回目の記念クルーズを迎えたことは、日頃から応援していただいている皆さまのおかげです。私たちこれから先もより多くの方々と共に世界の海へ漕ぎだすべく、今年も一年励んでまいります。本年もどうぞよろしくお願いいたします。(N.I.)

編後  
集記